

第53回 支店長のわがまち紹介



茨城県久慈郡大子町

若者の住む元気で活力のある、日本一の福祉のまちへ

袋田の滝の「氷瀑」

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとの密接な繋がりを持たせていただいております。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長がゆかりのある市町村をご紹介します。第53回は茨城県大子町です。大子支店長が大子町長綿引久男氏にお話を伺いました。

●大子町は「筑波経済月報」第3号（2013年10月）に本コーナー第3回目の紹介町として、特産品や観光名所等を中心にお話いただきました。改めまして、本町の魅力や特徴についてお聞かせください。

■人口減少対策にいち早く取り組んだまち

大子町では実質的に「地方創生」と呼べる取り組みを2007年から行っています。理由は人口流出、少子化による人口減少が10年前に既に進んでいたためです。人口減少をくい止めるためには、若い人が定住し、地域が活性化することが一番であると思い、「子育て支援」、特に子育て世代が定住できる「子育て支援住宅」づくりを大子町の主たる事業として進めてきました。しかし、10年前にはこの取り組みがまだ理解されませんでした。町全体に「子育て支援より高齢者支援の方が重要だ」という雰囲気があったからです。



子育て支援住宅



大子町長
綿引 久男氏

大子副町長
和田 宗介氏

大子支店長
豊田 雅彦

都市住民を対象に、大子町で家建てることを条件として20年間無料で農園付住宅用地を貸したことも多くの意見が集まりました。地元建築関係者には約3億円もの経済効果がありましたが、やはり理解されるまでには至りませんでした。

ところがこの取り組みが全国のマスコミで取り上げられ、「大子町が田舎暮らしに良い場所である」というブランドが生まれました。以来、移住者が増えてきました。

また、2014年に国が進める「地方創生」が始まったことで、町全体に「人口減少対策」「子育て支援」の重要性が理解されるようになりました。現在では、他の市町村にはない様々な子育て支援策が充実した「福祉のまち」とであると自負しています。

■子育て世代が選ぶ「子育て支援住宅」を造る

昨年までに整備された「子育て支援住宅」は40戸になります。入居者の半分は大子町に戻ってきた方々で、残り半分が「子育て支援住宅」が整備されたことで大子町に留まった方々です。今年も16戸を建築する予定で、若い世代の定住促進のため、こ

れからの4年であと44戸を整備し、最終的には100戸まで増やしたいと考えています。

子育て支援住宅は1戸建てで敷地が90坪前後あり、基本的な間取りは3LDKです。家賃は50,000円ですが、子ども1人で10,000円、2人で15,000円、3人以上では20,000円が減額されます。

公営住宅はみんな同じような間取りと思うかもしれませんが、プロポーザル方式で募集したものを、子育て世代のお母さん達にユーザー目線で選んでもらっています。そのため地元の建設業者は工夫を凝らした良いものを作り、また子育て世帯は良い物件に安く入居できています。

■国宝の原料「漆」とユネスコ無形文化遺産の原料「楮」



大子漆

大子町は江戸時代より漆の産地で、昭和30年代には採取量日本一にもなり、年間1,000kg以上出荷していましたが、現在は100kg程度です。しかし、2015年に文化庁が国宝等の重要な建造物については国産漆を使って修繕するという方針を打ち出したため、非常に国産漆に注目が集まり、

最近では京都や金沢等から購入したいという方が頻繁に訪れるようになりました。

「大子漆」は透明度が高く、質が良いため、人間国宝の方々にも使われています。今後さらに需要が拡大することを見込み、大子町では植栽をはじめました。



「本美濃紙」の原料「大子那須楮」

「大子那須楮」はとても品質が良いことから、ユネスコ無形文化遺産の認定を受けた美濃和紙「本美濃紙」の原料に指定されています。しかし、町の高齢化が進んでいることで、楮の栽培をする農家が減少し、また、楮を和紙の原料に加工する技術の伝承者も少なくなってきました。「大子那須楮」を使用

できないとユネスコ無形文化遺産の前提が崩れてしまうため、危機感を持った美濃市が後継者育成に協力してくれています。

今後注目される漆と楮、どちらも重要な大子の特産品として守っていきたいです。

●今後の展望についてお聞かせください。

■特産品流通公社の設立と林業活性化に向けて

大子町は漆、楮以外にも、奥久慈しゃも、奥久慈りんご、常陸大黒、奥久慈茶等の自慢できる特産品が沢山あります。しかし、いつまでも昔からのやり方だけではいけないと感じています。例えば常陸大黒ですが、品質がよく、値段も高値で販売されていますが、販売量のごくわずかなため、今後は販路を拡大する取り組みが必要です。他の特産品にも同様のことが言えます。そのため、まずは販売までできるような組織として「特産品流通公社」を設立しようと考えているところです。

また、林業についても今後どう活性化させるかが町の将来にとって大きい課題です。現在は伐採、搬出、チップへの加工までですが、最終製品を販売できるように体制づくりも必要であると感じています。



常陸大黒

■若者の住む元気で活力のある、日本一の福祉のまちへ

今後も子育て支援の充実化による若者の定住促進を図るとともに、農業・林業・畜産業・観光の振興、企業誘致を図り「若者の住む元気で活力のある、日本一の福祉のまち」を目指していきたいと思います。

●筑波銀行に期待することをお聞かせください。

最近では後継者不足から町中の飲食店が減少し、昼食をとる場所等も少なくなってきました。そこで今年度から商店街の空き店舗活用を支援しています。創業支援で国の認定を受けることも考えているので、何かをはじめようという人に対して、ぜひ地方銀行である強みを活かし、アドバイスや資金の支援をお願いしたいです。

また、現在進めている特産品流通公社の立ち上げについても、ご支援いただければと思います。